

【一繋ぎの】 チンチンの実の能力者【財宝】海賊女帝編

『チンチンの実』

この悪魔の実を食べた男は性行為がうまくなり、男根が性行為しようとしている女性の好みの形、性質に変形し極上の快楽を与えるものとなる。

さらに精液には老化防止の作用や、生臭い匂いには興奮させるフェロモンも混ざっており、まさしくセックスするための男となることができる。

そして一度膣内に射精した女性の元に瞬時に移動することもできるようになるため、いつでもお気に入りの女に会いに行くことが可能なのだ。

(まず初めはどの女性がいいか……くそ……手配書を見てるだけでムラムラする……)

念願叶ってチンチンの実を手に入れた童貞の男は、早速その実を食べて気になる海賊女たちの手配書を部屋で吟味していた。

世は大海賊時代。

おのずと海賊の中にムラムラするいい女もいるような時代。

男は以前から手配書に載っている海賊女たちに興味を持っていた。

麦わら海賊団にいる『泥棒猫ナミ』や『悪魔の子ニコ・ロビン』。

『海賊女帝ボア・ハンコック』などなど。

はたまた、海賊団に限らず海軍や革命軍などにも股間を熱くさせる女はごまんという。

(くぅ～悩むな～……えーい！　とりあえず能力者全員に手紙を送っちゃえ！！)

手配書を見て、もはや全員がチンチンを挑発しているかのようなポーズを取っているように見えた男は急いで手紙を掻きはじめた。

男が手紙を書く理由。

それはもちろん目当ての女性とセックスするためなのだが、その方法というのが、悪魔の実のもう一つの副作用を利用するというものだった。

悪魔の実を食べた女性限定でごく稀に副作用として、異常な発情状態となり性感帯となっている部分が疼いてチンチンの実を食べた男の刺激を求め、たまらなくなってしまうことがあるそう。

しかもその副作用はチンチンの実を食べた男とセックスしないと止めることができない。

そして、発情状態の女性はチンチンの実を食べた男とセックスしないと抑えることができないということをも本能で感知するため、自然と他の男とはセックスするという選択肢が無くなってしまう。

男はこの異常な性欲の副作用が出ていることを願い、もし出ているのであれば自分のところに尋ねて欲しいという手紙を書いて、能力者の女性たちに送ろうとしているのだ。

(よし、とりあえずこんな感じで……下手に下手に……どうせならラブラブエッチしたいからな……)

最終的にはラブラブエッチに持ち込みたい童貞男は、女性を変に挑発しない程度の書き方にし、手紙を完成させ配達を頼んだ。

果たしてこの手紙を呼んだ女たちは男の元を訪ねるのだろうか……

.....

.....

.....

思わぬ大物から返信が来た。

というよりも、男は強制的に送還されてしまった。

(ここはどこだ……一体どこに連れていかれるんだ……)

ある日突然何者かに襲われた男は、目隠しをされ、どこか分からない場所に連れてこられていた。

そして今、謎の人物に誘導されながら部屋に連れてこられる。

「男をお連れしました」

「はあ……はあ……わかった……もう……下がってよいぞ……」

(なんだ……なんか……荒っぽいけど……艶のある息遣いがする……)

誘導していたと思われる女が部屋から出ていき、恐らく会わなければいけない対象が目の前にいることを感じ取り、緊張のため息を飲む男。

「そなたがあのような無礼な手紙を送ったものか？」

「手……紙……あっ……はっ……はい……」

「ということは……そなたがあのお悪魔の実を食べたものじゃな……」

.....

.....

.....

「悪魔の実……というと、チンチンの実の事ですか？」

「くっ！！」

おどおどとした様子で男が質問に答えると、ボア・ハンコックはイラだっている表情で歯を食いしばった。

(なんと下品な実の名前じゃ！ 耳にするのも汚らしい！！)

ベットの上で身を悶えさせながら艶めかしい吐息を漏らし、心の中でチンチンの実の下品な名前に悪態をついている絶世の美女、ボア・ハンコック。

王下七武海の一人であり、女ヶ島を統べる九蛇海賊団の船長であり、海賊女帝。

長身であり、世の老若男女が見とれるくらいのグラマラスな容姿は、高飛車な性格が似合っていると他者に思わせるくらい絶世のものだ。

王下七武海としての強さも兼ね備えており、間違ってもこんな男に負けることなどないだが……

そんなハンコックは今、ベットの上で全裸になり、薄い毛布を一枚羽織って息を荒くしている。

(本来であればこのような男が女ヶ島に立ち入ることさせありえぬことじゃ!　じゃが……くっ……どうしても……身体の疼きが止まん!!)

「はぁ♡　くふっ♡　ふっ……んっ」

毛布で自身の身体を強く包み込み、疼きを感じる部分が熱を帯びたような感覚に陥り身悶えるハンコック。

甘ったるい香りがする室内と、明らかに高飛車な女の色っぽい艶のある声が聞こえてきて、不覚にも男は興奮し、勃起してしまう。

その勃起チンポに女体が反応したのか、ハンコックは目をつ開き、声を上げてしまう。

「あっ……あぁっ!？」

(身体が!?　身体が焼けるように熱くなってきおった!!　それに……これ以上は……我慢できん!!)

男という生物を毛嫌いし、確かな実力と魅力を兼ね備えたボア・ハンコックも、悪魔の実の副作用と、性欲という魔の手にうまく抗うことが出来ず、快楽が欲しいと疼く肉体に従うように、普段では取らない行動をとってしまう。

「はぁ……はぁ……不本意じゃが……目隠しを取れ」

「え……あっ……僕ですか？」

「他に誰がおる!!!」

「ひゃっ!!　はい!!」

男はハンコックに言われ、すぐさま目を隠されていた布を取って、恐る恐る前にあるベットの中を見て見る。

ベットキャノピーのベールで被われているため、確かな姿は確認できないが、自分より大きな身体をした女が、中央で息を荒くして座っている状態だということが分り、興奮が増してくる。

「ゴクッ……」

男の興奮に反応してか、はたまた目の前にいる極上の女の姿を前にしてか、肉棒がどんどん硬くなっていき、変形していく。

「くっ……」

男の股間の蠢きがベール越しからでも分かり、苦い顔をしてしまうハンコック。

(このような下品な男と……じゃが……背に腹は代えられん!　それに……もはや……我慢の限界に来ておる!!)

「はあ……はあ……そなたが……この身体の疼きを止められる術をもっておるのじゃな？」

「え……あっ……はい……」

「もし……嘘ならば……生きて帰れると思うな……はあ……はあ……」

だがこの時点でハンコックの脳もこの男のチンポこそが身体の疼きを癒してくれるものだということをビンビンに感じていた。

そのチンポへの反応がハンコックを普段では考えられない行動に駆り立ててしまう。

(このようなこと……本来のわらわなら……ありえんことじゃが……ダメじゃ！！ 身体が疼いて！！)

「はあ！ はあ！！ ああっ！！」

「っ！？」

一際荒い息遣いが聞こえてきたと思った瞬間、ハンコックがベールから全裸の状態に出てきたかと思えば、男の目の前でいきなり背を向けて両足を蟹股に開き、両手で尻の割れ目を広げて、肛門を見せびらかしてきた。

「ああっ！！ ああっ！！ ああっ♡」

閉じていた尻の割れ目が外気に触れた瞬間、敏感に感じてしまったハンコックのアナルは、卑猥にパクパクと呼吸を始める。

そしてハンコックは左手の人差し指をパクつく肛門に刺すように突っ込むと、自分でアナルを穿りだし始めた。

「ああっ！！ あゝ あゝ っ！！ 疼きが！！ 身体の疼きが！！ 特に……肛門の疼きが止まらんのだじゃ！！」

男はそのハンコックの痴態を見て、余りのエロさに一時呆然となってしまう。

片方の尻が自分の顔くらいのデカ尻で、その中央にある割れ目を蟹股で下品に開き、括約筋に力を入れながらアナルを引くつかせて、左手の人差し指でこねくり回すように穿っている。

「んゝ っ！！ んゝ んゝ っ♡♡ いいいいっ！！！」

(なぜじゃ……今までは我慢できたはずじゃ！！ それなのにこの男を前にすると……身体が勝手に動いて！？ 疼きが止まらぬ！！ ケツの穴をホジホジしてしまう！！！)

腰を逸らせて顔を天に向けて、尻の穴を穿りながら快楽を貪ってしまっているハンコック。

しなやかな腰の曲線美が、卑猥な反り方をし、下半身は蟹股で下品な格好をしている様は、とても海賊女帝だとは思えないものだった。

最初の高圧的な態度が一変して、自分の目の前で見せつけるように蟹股アナル穿りをし始めたハンコックに凄まじく興奮し始めた男は、ゆっくりとデカ尻の割れ目に顔を近づけていって、まじまじとその痴態を目に焼き付ける。

真っ白いデカ尻の中央に高飛車女とは思えないくらい可愛いピンクの花が咲き誇り、厭らしく開いたかと思えば、すぐさま物欲しそうにその花びらを閉じて、指を吸引していく。

「んんっ♡ んゝっ♡♡ んんんんんっ♡♡♡」

(なぜじゃ……こやつに見られているだけで……堪らなく身体が熱くなってくる!! じゃが……)

男にケツ穿りを見られて、快感で身体が熱くなってきたハンコックだが、同時に下半身に切なさを覚えて、何か圧倒的な刺激が欲しくてたまらなくなり、女体を卑猥にくねらせてしまう。

「んんっ♡ んゝ んゝっ♡♡ こ……これ!! わらわのケツ穿りを見とるだけでは、疼きは取れんぞ!!!! 何とかせい!!!!」

(何を言っておるのじゃ、わらわは! ! ? ?)

アナルを穿りながら歯を食いしばった表情で後ろを向き、男にあたりながらさらなる快感を欲するような発言をした自分に内心驚いているハンコックだが、既に快楽に抗いようのない状態まで来ていた。

「わかりました……ハンコック様!!」

ハンコックの申し出に嬉々として反応した男は、興奮した様子で鼻息を荒くしながら、尻を掴んでいるハンコックの両手に滑り込ませるように自身の手を突っ込んで、直にデカ尻に触れた。

「はっ!! はああああっ♡♡」

(手が!! こやつの手が、わらわの尻に触れておる♡♡♡ なんという……なんという高揚感じゃ!!!!)

男の両手が両尻肉に触れた途端、そこから包まれるような温もりと高揚感が広がっていき、蛇姫の身体全体を満たしていった。

そして女体の熱に呼応するように疼いていたアナルは、もっと刺激が欲しいと大きくヒク付きだす。

「はあっ!!! はあああ!! ああああっ!!! 尻の穴じゃ!!! わらわのケツ穴に!!!」

ハンコックは男の手の上から自分の尻肉をもっと揉んで欲しいと、もにゅもにゅと自身の両手を動かして、桃尻に快楽の刺激を与えようと卑猥に動き出した。

括約筋に力が入っているため、呼吸をしているかの如くアナルが開いては閉じ、開いては閉じを繰り返している。

先ほどのアナル穿りでケツ汁が少し漏れ出てきており、さらには尻を揉まれていることで気持ち良くなって身体をくねらせており、卑猥さが一層にも増して、男に襲い掛かってくる。

「ケツも……デカくて……柔らかい!!」

ハンコックの性欲むき出しの状態に興奮した男は、ケツ肉を揉みしだきだす。

ムニユムニユと強く揉むたびに、5本の指がすべて尻肉に沈み込み、形を変形させて、柔らかな弾力と張りのある質感を伝えてくる。

「おゝっ!! おおおおおお!!!!」

男の指が尻肉に強く沈み込むと、ハンコックはもっと強く揉みしだいて欲しいくなり、自身の手力を入れて、その下にある男の手を尻に押し込めていく。

「うおっ!!」

自分の手に被せるようにしているハンコックの両手が、尻肉を押しつぶさんと凄まじい力を籠めることによって、色白のケツに男の手形が付いていく。

真っ赤な手形が付いていくことによって、ハンコックのデカ尻を所有物にしたような感覚に陥り、男の支配欲が刺激され、興奮が増し、尻を弄ぶ両手により一層の力が込められていく。

もにゅ！ もにゅ！ もにゅ！！

男は尻を揉みしだきながら、腕に力を入れて、両尻肉を上下にむぎゅむぎゅと動かしていきながらさらなる刺激を与えていく。

「おゝっ！！ おゝおっ！！ おゝおゝ おおお♡♡♡」

（わらわはの尻が！！ このような下劣な男に弄ばれておる！！ じゃが……たまらぬっ！！ 身体が熱くなる！！）

尻肉を男にめちゃくちゃにされることに喜びと興奮を感じて、ハンコックは尻穴に切なさを感じ始め、チンポに媚びるように激しく腰をくねらせ、尻をフリフリし始める。

「……っ！？」

ハンコックが自分の両手を誘導しながら尻を揉みくちゅにし、顔に尻が当たりそうなくらいチン媚び腰振りをしだしている下品な状態に、男の興奮もタガが外れて、遂に舌を突き出し、パクついているアナルに勢いよく突き刺した。

ずりゅっ！！！！

「んゝおゝっ！！！！！」

男が舌をアナルに入れた瞬間、ハンコックには一瞬何が起こったのか分からないくらい強い刺激と圧迫感が尻から襲い掛かってきていた。

チンチンの実の力で男の舌はハンコックのアナルに侵入した瞬間変形し、直腸全体を嘗め尽くせるほど、長く、太く、そして熱く、形と性質を変えていたのだ。

「おゝっ……おお……おっ……」

（なんじゃこれは！？ わらわの尻の穴から……にゆるにゆるしたものが入って……尻の中を……圧迫しておる……）

唇を尖らせて快感に悶え、震えながらアナル内の圧迫感に緊張するハンコック。

「んゝっ……んゝんゝっ♡♡ くう……」

（たまらぬ……疼きが……絆されて♡ じゃが……このままでは……いかん！？）

アナルを襲ってくる快感は気持ち良いのだが、突然の侵入者に体内が驚いたのか、海賊女帝として人前では絶対に出してはいけないものが肛門から漏れ出そうになっていた。

「おっ！！ おほっ♡♡ んゝっ……んゝっ……くっ」

ハンコックは自分の尻に何が起きているのか知るため、恐る恐ると後ろを向いて確認する。

「んっ……なっ!？」

(何をしておるのじゃこやつは!!! わらわの……尻の穴に……舌を入れておると言うのか!?!? この蛇姫の尻の穴に!!!)

なんやかんや男性経験のない大きな女体に、初めて性的刺激を受けているのが肛門というだけでも屈辱的なシュチュエーションにも関わらず、排泄しか経験のないアナルが舌をねじ込まれて気持ち良く感じてしまっていることに、段々と頭がおかしくなり、チンポ脳になっていってしまう。

舌の圧迫感で快感を感じているハンコックだが、残り少ない理性で何とか肛門から漏れ出てきそうなものを堪える。

(いかん……それだけはダメじゃ……尻の穴は気持ち良いが……それだけは……ダメじゃ♡ 出してはならん♡ 絶対に出してはならんぞ♡)

顔を真っ赤に染め、歯を食いしばって肛門からそれが出そうな状態を我慢しているが、少しずつ口角が緩んでいき、頭の中で男にぶっかけている姿が繰り返し浮かんできていた。

そして、男の顔に掛けたらどんなに気持ちが良いのかと問いかけるように下半身が疼きだしてくる。

「ん`っ!!`ん`ん`っ♡♡`ん`ん`ん`ん`っ♡♡`ああっ……ゆっくりじゃ……ゆっくり……舌を……」

(ゆっくり抜けば……なんとか……)

強烈な刺激を送ってくる舌をゆっくり引き抜けば、蛇姫としての最後の威厳を保てると思っていたハンコックだが、男の耳には彼女の言葉は届いていなかった。

「んっ……んんっ……っ!？」

男は肛門にペロをねじ込んだ瞬間に自分の身体の変化には気づいたが、それよりも舌からくる海賊女帝肛門の濃い味と強烈な肉壁の締め付けに、こちらも気が狂いそうなくらいの興奮を覚えていた。

舌がいつもよりも敏感に味をとらえ、肛門内の直腸の肉壁の触感さえも生々しく脳に響き渡ってくる。

糞を通す直腸の少し苦みがかった食せば万病にも効きそうな濃くて臭い味わいが口いっぱい広がっていく。

肉壁はうねうねと絡みつきつつ肥大化している舌に対抗戦ばかりの凄まじい強さの締め付けでペロを引きちぎろうとしていた。

そんな濃厚な味わいとアナルバキュームに興奮しないわけもなく、肛門の締め付けに抗わんばかりに男は舌に力を入れて渾身の一撃をお見舞いする。

ニュルンッ!!!!!!

舌先に力を入れて締め付けるアナルを挟らんばかりに勢いよくペロを引き抜いた。

肉壁の協力的な抵抗感があったものの、ブンブンとこそぐようにダメージを入れていき、疼きを刺激した。

「おおおおお!?`おっほおおおおお♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

肥大した舌をアナルから引き抜かれた瞬間、耐えられないくらいの快楽を与えられたハンコックは、天を仰ぎながら絶頂面を晒し、ケツイキしてしまう。

そして肛門が瞬時にぱっくりと開いて、我慢していたものがそこから一気に排出される。

ブウウ!!! ブウッフウウウウウウウウ!!!

「うわぁっ!? くっさ!!!!!!」

ハンコックの特大蛇姫放屁を真正面から直に喰らった男は、余りの臭さに一瞬のけぞってしまう。

だが糞臭の中にほのかな甘さや大人の女性の匂い、さらには海賊女帝のからここまで特大の屁が出て、それを嗅げる幸せが押し寄せ、興奮が最高点に到達する。

「ハンコック様!! 凄まじく屁が臭いです!! ですが、もっと……もっと嗅がせてください!! 最高に臭くて気持ちいいです!!」

「んっ……くぁぁ……くっ……んっ♡」

(なんということじゃ……このような下劣な奴の前で……わらわは醜態を晒し……屁を嗅がれるとは……屈辱じゃ……)

ただでさえ蛇姫としての威厳を保つため人前で放屁などすることなどないハンコックが、自らケツを振って今日会ったばかりの男の顔面に屁をぶっかけて匂いを嗅がれる。

いくら悪魔の実の副作用とは言え、これほどの屈辱的な状態になったことはないはずだが、不思議と不快感は湧いてこなかった。

それよりも、別の感情が海賊女帝の脳を蝕み始める。

(い……いかん……こんな事は早くやめねば……わらわの放屁する場面を見ただけに限らず……匂いまで嗅がれるとは……この男……生きては返せぬ……今すぐにでも……今すぐに……♡)

「わらわの尻の穴を舐めるしか能がない下品な男め!!! そんなに屁を嗅ぎたければわらわのケツ穴をもっと穿らんか!!!」

(何を言うておるのじゃ!! わらわは!?)

ハンコックは男の顔面にデカ尻を押し付けて、アナル舐め穿りを命じる。

頭の中では現状のケツ穴舌舐め穿りに反発しているが、本能と女体がそうさせてくれなかった。

蛇姫であるハンコックからのケツ穴穿り要求と、目の前にある2m越えの巨体の特大デカ尻が童貞男を気が狂いそうなほど興奮させ、男は再びアナルに舌をねじ込んだ。

「れろっ!!! んぐっ!!!」

「んおっ!?! ほっ……ほおっ♡♡」

(また……わらわのケツ穴の中で……こやつ舌が……みっちり詰まっておる♡ ダメじゃ!! 次こそは、屁を我慢せねば!!)

「んっ!!! ん ん ん ん んっ!!!」

先ほどあんなことを言ったが、やはり本能では放屁をぶちまけることなど屈辱的だと考えたハンコックは、歯を食いしばって括約筋に力を入れ肛門を閉じようとして何とか自身の放屁を防ごうとしていた。

だがその括約筋の引き締まりで肛門が侵入している舌を締め付けまくり、引きちぎれそうなくらいの吸い

付きをベ口に与えて男を刺激する。

「ハンコック様! お任せくらひゃい! これからこのケツ穴を穿りまくって!! 疼きを必ず取って見せます!!」

そう言った男は舌に力を込めて勢いよく動かし始める。

「んぐっ!! れろっ!! れろっ!! れろっ!!」

グニyunッ!! グニyunッ!! グニyunッ!! グニyunッ!!

放屁しないように隙間なくぴっちりと閉ざされた肛門を、強制的に拡張するように、男は舌で円を描きながら肉壁を嘗め回した。

「ん` おおおおおおお!! お` おおっ♡♡♡♡ お` おおっ♡♡♡♡」

直腸をみっちり圧迫するほどの長くて太い舌が、アナルを無理やりこじ開けながら肉壁を舐める感覚が脳に電流のように響き渡り、凄まじい快感がハンコックの身体を支配していく。

両手を両膝に付け、蟹股踏ん張りの状態で歯を食いしばり必死に快感の波に溺れないように耐えている。

グニyunッ!! グニyunッ!! グニyunッ!! グニyunッ!!

「ん` ん` っ!!! ん` ん` っ♡♡ ん` ん` っ♡♡ ん` ん` っ♡♡ この程度のケツ穴穿りでええええ!!! わらわの尻が嗅げるとするなああああ!!!!!!」

(ああ、熱い!! 太い!! なんていう快感じゃ♡♡ じゃが……わらわは二度も醜態はさらさぬ!!!! 顔面ぶっかけ放屁など!! この女ヶ島の女王として!!!!)

アナルからくる圧倒的な快感を感じつつも、放屁だけはしないように必死に踏ん張って括約筋に力をいれ、肛門を閉じようとするハンコック。

そのアナルの締めにより男の舌が引きちぎられんばかりに吸引されるが、男もまた、負けてられないという思いでケツ穴を穿りまくった。

ハンコックの直腸の肉壁は男の舌の動きを止めるかのようにヒダヒダが絡みつき、まるで蛇がベ口に巻き付いて締めあげているかのような錯覚を覚えるほどの締め付けだった。

だが逆にこのケツ穴の締め付けは男を興奮させ、もっと舌で感じさせてやりたいという思いに駆られる。

パチンッ!! パチンッ!!!

「ん` んっ!!! ん` んっ♡」

男は両手を使い、程よい力で時折デカ尻を叩きだす。

尻肉が波打つように弾け、呼応するようにアナル締め付けが一層強まる。

さらに男は舌先に力を入れて、直腸の最奥をクニユクニユと嘗め回しだした。

「お` おおおおお!!?!?! お` ほおおおお♡♡♡」

敏感な最奥を穿られて全身を痙攣させるくらい感じまくったハンコックのアナルが、排出運動に切り替わってしまい、一気に舌を押し出されそうになる。

ブッ……ブッ……

内側の腸肉が肛門から捲れあがるくらいの排出運動で、肉棒と肉壁の隙間から禁断のガスが漏れ始めた。

「ん ん っっ！！！！ ん ん ん ん っっ！！ まだ出さん！！ もっと気合を入れてわらわのケツ穴を穿てみよ！！！！」

もう既にガス漏れが発生しているにも関わらず、ハンコックは強気に男を挑発した。

直腸穿りで白目を剥きそうなほどの快感を得てしまい、頭がチンポ脳になってしまったハンコックは、ケツ振りしながら男の顔にデカ尻を押し付けまくる。

（いかん！！ 屁など出してはいかん！！ じゃが、もう我慢できん！！ たまらぬ！！ 最大の肛門絶頂と共に、こやつ顔にわらわの屁をかけたくてたまらぬ！！）

チンチンの実のチンチンフェロモンや直腸全体がグニュグニュ変形するほどの強烈な肛門攻めを喰らって、ハンコックの脳はもはや快楽一直線の選択肢を取る様になってしまっていた。

アナル絶頂をしながら男の顔面に屁をぶっかけることを想像し、歯をくいしばって耐えている口角が緩く上がってくる。

ハンコックから挑発された男は、もっと舌に気合を入れて直腸を挟り始め、尻を叩く力を強めた。

パチンッ！！ パチンッ！！ パチンッ！！ パチンッ！！

「んぐっ！！ んあっ！！ れろっ！！ れろっ！！」

「お おおおお！！！！！！ お っ♡♡ お っ♡♡ お っ♡♡ た……たまらぬ！！！！ 尻の！！ 尻の疼きが気持ち良くなっていくううう♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

ハンコックは尻から来る痛みと快感に打ち震えながら踏ん張っていたが、より強めの攻めにさすがに耐えきれなくなり、括約筋の力が緩んで排出力が強くなっていく。

「んんっ！？」

今までで一番の肛門からの排出力に舌が押されているのを敏感に感じ取った男は、最後の一撃を与えてハンコックにケツ絶頂を与える準備をする。

「んん……んん……」

舌を最大限まで肥大させ直腸を圧迫し、さらに舌先を伸ばして最奥まで突き進めた。

「おっ！！ おおお♡♡ 尻が！！ 肛門の中が……圧迫されておる！！」

（わらわのアナルにとてつもない一撃を加える気じゃな♡ そなたのやろうとしていることは……肛門から伝わってきておるぞ♡♡）

悪魔の実の能力で直腸を舐め回されたことにより、男のやろうとしていることが分るようになったハンコックは、これから来る刺激に期待に胸を膨らませてしまい、緩み切ったチンポ顔を晒してしまう。

もはや痴態を晒して威厳が落ちることよりも、男とのセックス勝負に負けないようにすることに脳がシフトされていた。

「ぬ っ！！！！ ん ん っ！！！！ わらわの肛門に強烈な一発をお見舞いする気じゃな！！ やれるもの

ならやってみよ!!!　そして、わらわを絶頂放屁させてみるがいい!!!」

ハンコックは蟹股の下半身にさらに力を入れて気張り、男に屁を嗅がせるため尻を押し付けまくった。

最後の力と言わんばかりに括約筋に力を入れて舌を逃がさぬように肉壁が絡み、吸い付く。

男はこの挑発を受け、舌に力を込めた。

「ハンコック様!　アナルで思いっきり感じてください!!　そして絶頂放屁を思いっきり顔にぶっかけてください!!!」

「ふっ!!　やってみるがいい!!」

(ああ……ダメじゃ!!　絶頂放屁など……そんなこと……ああ♡♡♡　かけたい!!　思い切りデカい一発をこやつ顔面にブチまけたい♡♡)

「はあ♡　はあ!　はあ!」

ハンコックは腹に溜まったガスをぐうぐうと鳴らしながら放屁の準備を整える。

そして男が目を見開いて舌に力を込め、

パチンッ!!!

勢いよく両手で舌を叩き尻肉を鷲掴み、先ほどよりもさらに力強く挟る様に蛇姫の肛門から舌を引っこ抜いた。

ニュツツツツツツルンツツツツ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

「おゝっ!?　おおおおおおおおおおおお♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

強烈な吸い付きを見せていたハンコックの直腸に力強く反発しながら、舌を抜き出すと、ぱっくり開いた肛門から遂に禁断のガスが噴出される。

ブッ!!!　ブブウウウウウウッ!!!!!!!!　ブウウッ!!!　ブウウウッ!!!!!!!!

「くああああああ!!!」

「おっ!!　おおおお♡♡♡♡　嗅げ!!　嗅ぐのじゃ!!!　わらわの屁を!!!　堪能するのじゃああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

男は放屁の勢いと余りの臭気に押されそうになるが、蛇姫様の放屁を少しでも逃さないように鼻をぴったり肛門に付け、嗅ぎまくった。

ブウッ!!　ブブッ!!　ブウウッ!!　ブウウッ!!

「おゝ　おっ!!　おゝっ!!　おほっ!!　おゝ　おお♡♡」

放屁が絶頂の合図かの如く、ハンコックは肛門で絶頂しまくっていた。

男の顔を尻から感じ取り、確実に自分の高貴なオナラが嗅がれていることが分り、口元を尖らせ瞳に涙を浮かばせながらアヘイキしている。

踏ん張っている下半身が絶頂に震え、肛門にあった圧迫感から解放されて緩み切ったのか、ハンコックはそのままの気張った体勢で放尿を始める。

ジュロツ……ジュロロロツ……ジュロロロロロロロロロ……

「うおっ！！ ごくっ！！ ごくっ！！ ごくっ！！」

男はその蛇姫の聖水に気づき、チャンスと言わんばかりに口を開けて飲み始めた。

「あゝ♡♡ あゝ ああ♡♡ 飲んでおるのか……わらわの……尿を……♡♡」

凄まじい絶頂だったせいで余韻も大きく、男にされるがままに尿を飲まれているハンコック。

(こやつに屁も嗅がれ……尿も飲まれておる……海賊女帝と言われておるわらわが……ここまで痴態を晒して……♡ それもこれも副作用のせいじゃが……こやつの好きにはさせぬ♡)

この時、ハンコックの脳は今まで感じたことのない余りの快楽に完全にチンポに魅了されてしまう。

「ごくっ！！ ごくっ！！ ごくっ！！ ぶあっ！！ ごちそうさまでした！！ ハンコック様！ オナラの匂いも、オシッコの味も最高でした！！！」

パチンッ！！

屁を嗅ぎつつ尿を飲み終えた男はハンコックの尻を叩き揉みしながらそう告げると、ゆっくりと立ち上がった。

そして、物欲しそうに厭らしくパクついているアナルに、肥大した肉棒を当てがって、尻の割れ目に沿うようにして這わせだす。

「ふう！！ ふう！！ どうでしょうハンコック様、ここは身体の疼きを止めるために、一度試しアナルセックスをしてみるといふは？」

「はあ……はあ……アナル……セックスじゃと？」

「はい。ハンコック様の悪魔の実の副作用は特に尻の穴の疼きが強いみたいなので……それを抑えるためにも、一度肛門でチンチンを受け入れて精子を注いだ方が良いかと思ひまして……」

ズリュ……ズリュ……

一歩間違えれば間違いなく死刑になることを考えても、ハンコックとアナルセックスしてみたいという欲求には抗えず、男はゆっくりと尻をほぐすように肉棒を這わせながら、優しく尻肉を揉みつつ、蛇姫と交渉してみる。

自分よりも身体がデカく態度も地位もデカイ女の尻を優しく揉みながら肉棒を這わせることに異常な興奮を覚え、既に張り裂けそうになるくらい愚息は肥大化していた。

(何を言っておるのじゃこやつは……アナルセックスなどと……それは……わらわの肛門に……チンポを入れるという事か？ 今、わらわの尻に当てている……このデカチンポを……そのような事……そのような事……♡♡♡♡)

「ふっ！！ やってみるがいい！！ 貴様のそのデカチンポがわらわの肛門の疼きを完全に取れるというならな！！ ただし、できなかったときはどうなるか分かっておるな？ この汚らしいデカマラを叩き切ってくれる！！！」

そう言いながらハンコックはチンポに媚びた腰振りでチンポにデカ尻を押し付ける。

もはやハンコックの脳はセックスに対する快感に期待するようになり、アラサー処女にも関らず、本能か

らくる性知識が溢れんばかりに頭の中を支配していき、それに応じて身体も熱くなってきていた。

「任せてください！！ 必ず蛇姫様の肛門の疼きを取ってみせます！」

勢い込んだ男は両手でハンコックの尻の割れ目を開くと、ケツ汁を垂れ流して物欲しそうにパク付いているピンクのアナルをまじまじと見た。

「……ゴクッ……」

改めて自分よりも強くて地位も高く、何より絶世の美女の肛門がチンポ欲しそうにヒク付いているのを見て興奮が高まった男は、ゆっくりと亀頭をあてがい、腰を押していく。

クニュ……クニュ……ズリュッ！！！！

「ん` っお` っ!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

「っあ!?!」

男が亀頭からゆっくりと腸内に入れようとした瞬間、凄まじいアナルの吸引力で肉棒が根元までみっちり入り込んでしまう。

すると舌同様、肉棒がハンコック好みに変化していき、直腸全体を圧迫するくらい肥大化し、硬くなり熱くなった。

「お` っ♡ おお……お` っ♡♡」

先ほどの舌よりも強固で熱く太くなった肉棒が直腸を圧迫し、ハンコックに内側から今まで感じたことのない強烈な刺激を与える。

(先の舌より……わらわの肛門を圧迫しておる……♡ 身体が……中から熱くなってきて……もしやこれが……恋♡♡♡)

極太チンポをアナルに突っ込まれ、その反応の身体の熱さで感じたハンコックは瞳に♡マークを浮かび上がらせる。

「くっ……ハンコック様……凄まじい肛門の吸い付きです……チンポがちぎれそうです……」

「ん` っ!` ん` んっ♡♡♡ 軟弱な男め!` ほらほらどうした!!` んんっ♡♡♡ ただチンポを肛門に突っ込んだだけでは、わらわを満足させ疼きを取ることは出来ぬぞ?」

前向きにチンポを受け入れる脳になってしまったハンコックは、挑発的な笑みを浮かべ、腰をグラインドさせながら肉棒を刺激する。

「うっ!?!` うう!!` すぐにでも……射精しそうだ……でも……負けてられない!!」

蛇姫の腰振りに男も射精しそうなチンポを耐えて、ハンコックの括れている腰を両手で掴んで肉棒をアナルから引き抜こうとする。

男がゆっくりと腰を引き、肛門から肉棒を抜こうとすると……

ニユルッ……ニユルッ……

「お` っ!!` お` おおおおおおっ♡♡♡ お` お♡ お` おっ♡」

極太の肉棒が詰まりに詰まった大便のように排泄される感覚が脳に電流が走っているくらいの痺れる刺激を与える。

王家七武海としての凛々しさはそこになく、唇尖らせ雄たけびを上げ、下品なポーズをしてアナルセックスでアヘ面を晒しているチンポ女の顔していた。

「くっ……くう……」

ハンコックのアナルは内側の肉壁が捲れあがるほど強く肉棒を掴んでおり、その刺激と視覚からの刺激で既に射精しそうなくらいの快感を男は得ていた。

「ん`ん`ん`ん`ん`ん`ん`ん`っ！！！！ 逃がさん！！ 逃がさんぞおおおお！！ そなたのチンポをわらわの肛門で喰ろうてやるわああ！！！！」

チンポがアナルから引き離されていくと、直腸と子宮がキュンキュンしだして一気に切なさが増したハンコックは、肉棒を肛門から逃がさないように括約筋に力を込めて引き入れようとする。

少しでも油断すると肛門内に肉棒を引き戻されそうなくらい強力な吸い付きと、アナル舐めでの興奮もあり、男は限界を迎えようとしていた。

「ゴクッ……」

巨大な尿体のデカ尻に自分の童貞チンポが食われている状態をまじまじと見る。

見事に括れた腰つきと曲線。

スタイル抜群だだ肉肉しさがあるむっちりとしたボディを前にして、一応極刑なども頭をよぎったが、余りのエロさに男のタガが外れてしまう。

「ハンコック様！！」

蛇姫の名前を叫んだ瞬間、男は乱暴に腰を振り出した。

パンッ！！ パンッ！！ パンッ！！ パンッ！！

「おおお♡♡♡ ほおっ♡♡♡ ほおっ♡♡♡ ほおっ♡♡♡」

踏ん張り蟹股ポーズでアナルセックスをするハンコック。

直腸内を極太チンポがゴリゴリと抉り、肉壁一つ一つを刺激していく。

男が腰をぶつけるたびにデカ尻肉が打ち震え、全身が波打つように痙攣した。

「ん`ん`ん`ん`い`い`い`い`いいい♡♡♡ チンポおおお♡♡♡ チンポおおお♡♡♡♡」

一突きするたびに絶頂しているような快感を与えられ、涎を垂らしながら目を見開き、下品に感じまくっていた。

排泄する感覚と押し戻ってくる感覚に一気に腸内が圧迫されて、辛うじて立っているくらいの感覚で踏ん張っている。

「ハンコック様ああ！！ チンポ……喰ってください！！ これから一生をかけて、あなたの身体の疼きを解消してみせます！！！！」

「んんんん っっ！！！！ ああ ああ ああああ♡♡♡♡♡」

(一生をかけてじゃと！！！！ それはもはや……結婚♡♡♡)

男に言われた言葉で身体全体に幸福感が押し寄せて、一段と括約筋に力が入りチンポを吸い寄せるハンコック。

ただ悶えることしか出来ないくらいの快感で意識を保っているのがやっとだった。

パンッ！！ パンッ！！ パンッ！！ パンッ！！

「もう限界です！！ 腸内射精します！！」

腰をしっかりと掴み、反発してくる尻肉と戦いながら男はハンコックに腸内射精した。

ドッピュウウウウ！！ ドッピュウ！！ ドッピュウ！！ ビュルッ！！ ビュルッ！！ ビュルルルッ！！

「んあああああ♡♡♡ イクッ！！ イクッ！！ イっくうううう♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

(肛門から体内に！！ 精液が染みてきておる……♡♡♡♡)

腸内射精を受けて、全身を痙攣させながら絶頂するハンコック。

アナル舐めよりも強力な快感を喰らったハンコックはそのまま倒れそうになったが、間一髪のところで男が支えて、そのままの勢いで何とかベッドの端に倒れ込む。

バサッ……

「あっ……♡♡♡♡ ああっ……♡♡ あっ♡ あっ♡」

ヌチャ……

その倒れ込みでハンコックの肛門から肉棒が抜けた瞬間、

ブリュッ！！ ビュチュチュチュ！！ ブリュッ！！ ブリュ！！

まるで大便を出すかのようにして白濁液が下品な音とともに肛門から漏れ出てきた。

ハンコックがケツを見せて蟹股の状態でうつ伏せにベッドに倒れ込み、ぱっくり開いた肛門が厭らしく蠢きながら精子を垂れ流す姿を見て、男はまた興奮して股間のモノを大きくしていた。

「ハンコック様……」

男は意識が朦朧としているハンコックに後ろから抱き着いて、勃起チンポをデカ尻に擦り付けながら、彼女の意識が戻るのを心地い余韻を感じながら待っていた。